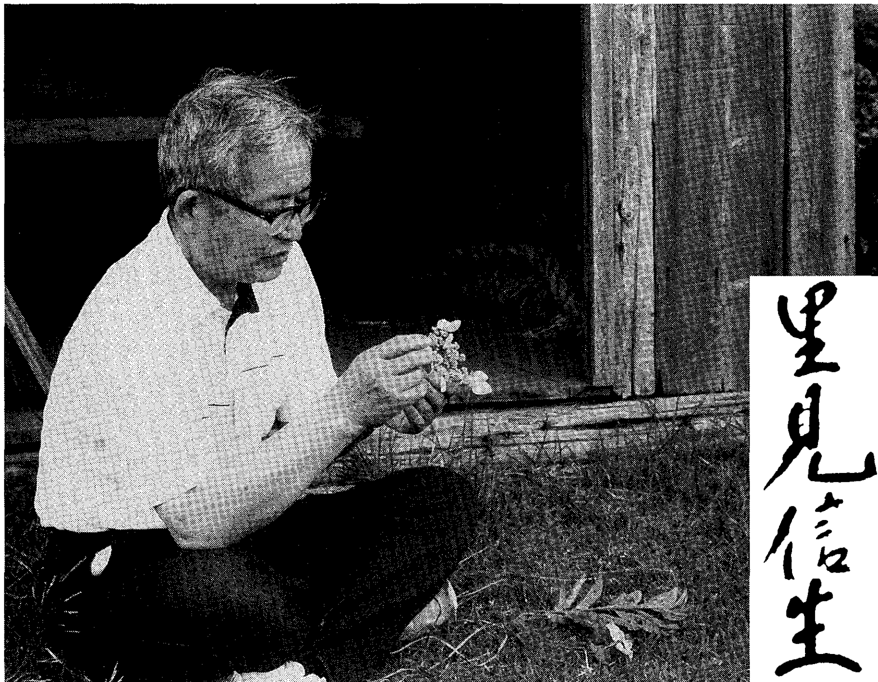
追　悼

里見信生先生（1922–2002）
Professor Nobuo Satomi (1922–2002)



観察中の里見信生先生（金沢植物同好会の第127回例会，石川県森林公園，1988）と署名
Professor Nobuo Satomi (1922–2002)

2002年６月２日，里見信生先生は入院先の病院で急逝されました．死因は心不全でした．入院されておりましたが，こんなに急にお亡くなりになるとは，思っておりませんでした．本当に残念です．

先生は1922年９月27日のお生まれです．お父様の哲太郎氏は，法律家で高級官吏でしたので，全国各地を転勤され，ちょうど，任地が長野県の時に先生がお生まれになったので，信生（のぶお）と命名されました．本籍は徳島県で，蜂須賀家の家老のご一族とうかがっています．その後もお父様の転勤にともなって，沖縄，東京など各地を転々とされました．このように幼時から各地の自然・風物に接する機会に恵まれたことが，先生の人格形成に大きな影響を与えたと思われます．

幼時より植物観察・採集には関心を持たれましたが，これはお姉さんが薬専の学生だったので，その感化によるものといわれています．少年時代は，牧野富太郎先生の面識をえて，親しく教えていただいたとうかがいましたが，これも進路の選択に大きな影響を及ぼしたようです．

1942年春，先生は東京高等農林学校に入学されました．しかし，時代はその前年に太平洋戦争に突入しており，学徒動員で徴兵，満

州（中国東北部）に派遣されました．軍隊生活中も，植物への関心は止むことはなく，手帳の間に小さな押し葉をつくられた，というエピソードが残っています．やがて敗戦をむかえて除隊．しばらくでしたが，徳島県立那賀農林学校教諭を勤められました．1946年，文部教官となり，千葉農業専門学校に勤務．1950年より，千葉大学園芸学部の助手となり，1951年，正宗厳敬教授の招きで，金沢大学理学部に来られて，植物第一講座の助手となられました．当時，金沢大学は発足したばかりで，理学部植物第一講座は，植物分類学をはじめ植物地理学，群落学，形態学などが分担分野でしたが，ほとんど，何もない状態からの出発でしたから，標本庫，植物園，雑誌「北陸の植物」（現在の「植物地理・分類研究」）などの設立・創刊と運営に関わる膨大な事業を，短期間に遂行する必要がありました．先生は，正宗厳敬教授のもとでその実務面を担当され，持ち前の優れた実務能力を発揮されてその成功に貢献されました．1958年，金沢大学理学部講師となり，隣県の富山大学理学部，福井大学学芸学部などの講師を併任．1964年，金沢大学大学院理学研究科担当となり，1987年理学部教授となられ，附属植物園長を兼任，1988年に停年退官されました．

この間，1983年には，石川県で開催された第34回植樹祭に臨席された昭和天皇を，塩屋海岸（加賀市）の海浜植物群落と能登一宮「気多神社」（羽咋市）の社叢林に案内され，とても光栄に思っておられました．1989年日本植物分類学会会長，1993年全国巨樹巨木林の会会長などを歴任されました．

1990年代は1996年頃より健康がすぐれず，入院・退院を反復されていましたが，やがて，肺繊維症のため，酸素ボンベを常用されるようになり，野外活動はもちろん，外出も困難となりました．しかし，執筆活動は続行しておられましたし，訪問客には積極的にお会いになり，相談にも応じておられたので，今度の入院もやがてはご退院のことと考えていたところでした．

里見信生先生の業績はいろいろありますが，その最大のものは，正宗厳敬先生に協力して金沢大学理学部植物第一講座を確固としたものに育て上げられたことだと思います．この教室は現在では「植物自然史」の名を付して呼ばれており，また，大学院の編成上のことなどもあって，当時とは当然，異なってきております．しかし，その発展の基礎の構築に，生涯のほとんどを注がれたことは，だれもが認めるところです．標本庫の例をあげると，大学発足当時，旧来の旧制第四高等学校から受け継いだ標本は，現在保存されている標本を調べてもわかるように，非常に少なく，ほとんど，この発足の時点から，関係者の努力で積み上げてきたといっても過言ではありません．現在の標本数はほぼ30万点に達していますが，創設当時の数千点の時代を知るものにとって，この数字はまことに驚くべきもので，創設の時代に正宗厳敬教授に協力された里見信生先生の献身に負うところが大きいのです．この標本庫を訪ねた人は誰でも知っていますが，植物種のジーナスカバーは，外国産をはじめ，大地域別に区分をして収納されています．「富山・能登」産と「加賀・越前」産は，さらに特別に区分され，目立つようにジーナスカバーの下辺に黒線が入っています．この方式は現在も引き継がれ，標本庫が北陸地域の植物種のコレクションに重点をおいていることを，具体的に示しています．これらの標本の蓄積が，北陸地方，あるいは植物区系としての日本海地域の解明に大きく寄与したことはご存知の通りです．また，雑誌「北陸の植物」は，正宗厳敬教授を編集者として始められたものですが，編集事務や会計などの実務の多くは，里見信生先生が担われました．1979年，すでに名誉教授だった正宗先生が，編集者を辞められて，この雑誌の一切を先生に委ねられた際，これをお引き受けになり，雑誌名の変更，編集委員会制度，レフェリー制などを導入して，学術雑誌として本格的な態勢を整えられるとともに，編集委員会代表（後の編集委員長職）に就任されました．このことについては，編集委員の先生方の協力も大きいのですが，先生の存在なしには，雑誌の存続とこのような改革は難しかったと思われます．創刊以来，雑誌の成長をしっかりと支えたのは，購読者・投稿者・協力者の全国に張り巡らされたネットワークで，先生は，これらの方々と密接な人間関係を築かれました．1950年代から1960年代は，日本全体

が未だ貧しい時代でしたから，先生と採集旅行にいきますと，特に親しくされておられたこのような方々のお宅に宿泊させていただくことが少なくありませんでした．もちろん，夜はご当地の植物を中心に話に花が咲きましたが，まるで，芭蕉らの俳諧の旅のような感じだな，と思ったものでした．

地域の植物的自然の解明，いわゆる，地方の植物研究は，たんに植物相の調査研究にとどまるものではなく，それに加えて区系地理学や群落学を含むもので，ヨーロッパのいわゆるGeobotanyにあたるものと思います．正宗厳敬教授のお考えで，石川県はもとより，北陸地方，さらに日本海地域の植物研究をすすめることは，創設当時の教室の方針でした．実際のところ，植物区系としての日本海地域やさらにまた，そのなかでの北陸地方の特殊性などは，まだ明確ではなく，具体的なデータによる証明はその時代の重要な課題でした．里見先生は，この点では，ラン科などについて植物分類学者として固有の仕事もありますが，地方大学の教官はすべからく，その学識をもって，その地域に貢献すべきであるとの信念のもとに，地域の植物研究の分野で大きな成果を残されたと思います．成果は，いずれも，人材の育成や組織づくりと結びつけておこなわれたので，共著，編著，共同著作，研究団体など編集・編纂の形式で発表されたものが多いのですが，このことによって，石川県の植物研究態勢の基礎が整備されたのです．　一例をあげると，金沢植物同好会は正宗厳敬先生が在野の人々と1950年に組織された，石川県に現存する最も古い自然史系団体ですが，植物関係だけにとどまらず，ここから各分野で活動する人々が多数生まれました．第一世代の人々が引退したあとは，大学側では里見信生先生がその運営をバックアップされておりました．石川植物の会は，石川県植物誌（1983）を編纂するために組織されたものですが，その後，教職員のこの分野の研修を目的とした団体として成長してきました．この植物誌の編纂は先生が指導され，監修を担当されました．現在，石川県をフイールドとする研究団体として，石川県地域植物研究会がありますが，これは1985年に結成され，先生が初代の会長に就任されております．この会の代表的な共同著作としては，約10年の調査・研究をまとめた石川県樹木分布図集（1994）がありますが，先生は裸子植物やカバノキ科などを分担執筆されました．また，巨樹の重要性に注目され，1989年，同志の方々とともに全国に先駆けて石川県巨樹の会を結成，初代の会長を務められました．先生が著者，共著者，編集，共編著となっているものには，石川県樹木誌（1977），石川県樹木誌図譜（1987），石川の植生（1975），石川の自然環境「第2分冊　植生」（1：50,000植生図集），石川の巨樹（1982）など各分野の基礎的な仕事があります．その他，先生が石川県や環境庁（現環境省）などの関連で，調査執筆に関わられたこの地域の調査報告書類は，100編近くあると思います．

また，先生は石川県自然環境保全審議会，同森林審議会，同文化財保護審議会などの委員を務められ，金沢市自然環境保全審議会の委員長の職にあり，専門分野に密接な行政分野にも献身されました．

これらの一連の功績により，石川県より特別表彰，金沢市より金沢文化賞，環境庁長官，文部大臣などからいくつかの褒賞を受けられました．特に金沢市からのものは「植物地理学の研究・教育と金沢市自然環境保全審議会への寄与」が理由となっており，逝去にあたり，金沢市は「景仰の証」に名を刻みました．

早くから自然史博物館の必要性を訴えられ，自然史関係の各分野の有識者とともに設立運動を始められたのも，里見信生先生でした．石川県自然史博物館設立準備会が設置されて，1978年には石川県知事に最初の要望書を提出され，翌年には，同準備会代表にも選ばれました．この運動はいろいろに形を変えながら存続し，現在は，「石川県に自然史博物館を実現する会」に発展しています．近年の運動には，健康を害しておられたこともあって，参加はしておられませんでしたが，深い関心をお持ちでした．逝去されてからほぼ三ヵ月後，石川県教育委員会は，石川県自然史資料館（仮称）の第1回基本構想策定委員会を開催しました．オープンは2005年度と発表されています．長年にわたる先生の熱意が，次第に報いられつつあると言っていいだろうと思います．

先生は，なかなか趣味の広い方で，金沢大学勤務当時は落語研究会の顧問をなさいましたが，ご自分でも山遊亭銭朝の名で，植物関係のパーテイの折などに，落語をご披露されました．また，料理もお得意で，学生時代には木曾坂の職員寮に結婚前の先生をお訪ねして，手作りのおでんなどをご馳走になったこともありました．これは，暖簾をかけた部屋で模擬店を設え，釜で煮るという本格的なものなので，田舎育ちの私などはびっくりしたものです．コレクションも先生のご趣味で多岐にわたりますが，帽子などの紋章，ぐいのみ，矢立などはかなり集めておられたと思います．

先生と私の関係は，見方によっては少し特別なものかもしれません．直接の師弟関係ということになりますと，正宗厳敬先生になりますが，1953年に創設されたばかりの金沢大学に入学（当時はまず教養部理科Ⅰ類に所属）して，すぐ，紹介されたのが少し前に赴任された里見信生先生でした．シニアに進級した当時は，教授の講義には助手の先生が同伴されるのが慣わしでした．植物第一講座の学生は少なく，私ともう一人の二人だったものですから，その同級生が欠席すると，教官が二人に学生は私が一人の割合になり，なんとも気まずい雰囲気となるのでした．里見先生が困惑しておられた様子が懐かしく思い出されます．それ以来，標本貼りの仕方からはじまって，近年はあまり多くの審議会の委員などを兼任してはならない理由にいたるまで，いろいろ，具体的なお教えを頂きました．これも私が若い頃，ちょうど，先生が講師になられた時期に，少しの間でしたが正宗厳敬教授のご好意で助手として勤めたり，その後も勤務先が理学部の近くだったこともあって，本当に親しくさせていただきました．教室や雑誌関係のことで重要な問題があると，意見をお聞きになることもありました．

いま，先生は徳島市の古刹，丈六寺にある先祖伝来のお墓に静かに眠っておられます．心からご冥福をお祈りいたします．

（古池　博）

新　刊

□安藤敏夫，小笠原亮（監），森　弦一（編）：**日本花名鑑 2**　386 pp.　2002.　¥2,980.　日本花名鑑刊行会.

先に紹介したものの第２号である．2000年の市場流通品の中から第１号と重複しない約400種類を収容した．本書のグループ分けは市場での取扱いに合わせてあるが，前号とはその順序が変わり，掲載種類数の少ないグループを先に示してある．本号では前回手をつけられなかったランが，一つのグループとして加わった．ただしオリジンの探索が大変なようで，店頭で見覚えのある花が「詳細調査中」として属名だけ示されている種類もある．前号で問題になったカラー写真の不鮮明は，図の数をへらしてサイズを大きくした結果かなり改善されているが，ものによっていま一息というのもある．索引は1，2号合わせて作られていて便利だが，これは先行き無理になるので，一工夫せねばなるまい．新しい試みなのでいろいろ手直しが必要だろうが，創意工夫で切り抜けてもらいたいものだ．

（金井弘夫）

□Watanabe T., Takano A., Bista M.S. & Saiju H.K. (eds.): **Proceedings of Nepal-Japan Joint Symposium on Conservation and Utilization of Himalayan Medicinal Reseources** 368 pp. 2002. Society for the Conservation and Development of Himalayan Medicinal Resources.

2000年11月にカトマンズで行われたヒマラヤ地域薬物資源の保護と利用に関するシンポジウムのまとめである．参加者約200名，その内日本からは36名，ネパール以外の国から５名が出席し，60件を超えるさまざまな発表が記録されている．シンポジウムの結論としては，ヒマラヤの薬用資源利用の活性化と民生への応用のために，inventory 作りの必要性が述べられ，そのために Department of